

北海道 150 年道民検討会議 第 1 回北海道みらいワーキング 議事録

日時：平成 28 年 6 月 20（月）13:00～14:40

場所：北海道庁別館 9F 第 1 研修室

【出席者】

< 委員 >

小磯委員【座長】、大津委員、折茂委員、河崎委員、曾田委員、津山委員、林委員、山崎委員、山谷委員、吉田委員 計 10 名

< 事務局 >

（北海道経済連合会）菅原理事・事務局長、水野総括部長、山崎次長

（北海道商工会議所連合会）吉田政策企画部担当次長

（北海道）平野政策局長、岩崎北海道 150 年事業準備室長、青山主幹、武藤主査

● 平野政策局長（事務局：北海道）

時間になりましたので、「北海道 150 年道民検討会議・北海道みらいワーキング」をこれから開催させていただきます。進行を務めさせていただきます、私は総合政策部政策局の平野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、はじめに事務局を代表いたしまして、山谷北海道副知事からご挨拶を申し上げます。

● 山谷委員（北海道）

どうも皆様ご苦労様でございます。大変天候の悪い中、ご参集いただきまして、お仕事もいろいろとお忙しいことと思いますが、心から感謝を申し上げたいと存じます。

もう既に皆様報道等でご承知のことと思いますが、2年後の平成 30 年、松浦武四郎さんが政府に提言をし、「北海道」とこの地が命名されてから 150 年目を迎えるということでもあります。さまざまなこれまでの歴史の変遷もありましたが、やはり 150 年というのはひとつの節目として、これまでの歴史を振り返り、次の 150 年に向けてどんな一歩を踏み出したらよいだろうか、この機会にそうしたことを多くの道民の皆さんと共に考え語り合い、そして、未来に向けての力にしていけることができれば良いなということで、記念事業を実施したいということで、検討会議を立ち上げさせていただきました。

先般、6 月 10 日に、事業の基本方針を策定するために、北海道 150 年道民検討会議の第 1 回会議が開催されたところではありますが、私も出席をしておりました。皆さん、それぞれのお立場から、これまでの北海道をしっかりともう一度見つめ直して、次に向かっていろいろなアイデアを出していこうと。「バーチャル道民」というのもありますし、それから北海道のこれまでのさまざまなデータベースに皆さんが簡単に触れることができる、そんな仕組みづくりとか、そうしたお声も頂戴しました。

そうした中で、アイヌ協会の加藤理事長から、「今日こうした場に自分が座っている、そのことを多としたい。どうしてもアイヌというと、和人と対立をし迫害を受けたというふうにこれまでなっているけれども、実は、開拓の時にさまざまな地域で道案内をして、これまで人が踏み入れたことがない地域まで案内をした。また、この寒い厳しい自然環境の中で、本州から来た人が暮らしていく、そのときの食べ物の調達からして実は協力をしてきたと。我々も、今日の北海道を築くために協力をしてきた

という自負がある。我々も同じテーブルでこれからの北海道について語り合うことができるというのは、大変よい機会だと思う」というふうにご意見を頂戴いたしました。

まさに、北海道はお互いに助け合って共生をしてきた、そういう大地であろうと思うのでありますが、そうしたことも含めて、これからどのように我々が生きていったらいいのか。ここにお集まりのワーキングの皆さんは、若い世代を代表する方々ということでもありますので、これからを生きる若い人々を代表して基本方針に反映できるご意見、ご提案等を頂戴できれば大変ありがたいと思うところでもあります。

お忙しい中、北大の小磯先生には座長をお引き受けいただきました。よろしくお願ひしたいと存じます。何かあればすぐ小磯先生を頼むという道庁の悪いクセがあります。検討会議と、このワーキングをつないでいただく、そうした橋渡し役もお願ひしたいと存じます。

また、このみらいワーキングも、道経連、道商連、道による共同事務局であります。一時、道で議論していると我々も盛り上がってきて加熱するのでありますが、これは、道庁だけで考える話ではない、道民の皆さんと一緒にいろいろなことを考えてやっていく、そういう事業であろうということで、共同事務局もお願ひしたところでもあります。事務局の皆さんもどうぞよろしくお願ひしたいと存じます。

結びになりますが、どうぞ皆様の熱い思いをこの基本方針に頂戴できることを心から願ひまして、私のご挨拶とさせていただきます。よろしくお願ひします。

● 平野政策局長（事務局：北海道）

それでは、ここで本日お集まりいただきました委員の皆様をご紹介します。

〔 ※小磯座長を紹介 〕

小磯座長におかれましては、6月10日の道民検討会議におきまして、設置要綱に基づきまして、山口委員長から、本ワーキングの座長として指名されておりますので、ご報告をさせていただきます。

〔 ※席順に従って委員を紹介 〕

大津委員、折茂委員、河崎委員、曾田委員、津山委員、林委員、山崎委員、吉田委員、山谷委員
なお、曾田委員におかれましては、都合により途中で退席させていただくことになっておりますので、予めお知らせをさせていただきます。

それでは、以降の進行につきましては、小磯座長にお願ひいたします。よろしくお願ひします。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

改めまして、座長役を務めさせていただきます小磯でございます。よろしくお願ひいたします。

6月10日、道民検討会議に私も参加させていただきました。そこで、このみらいワーキングの方で、基本方針の策定に関わる重要な検討をお願ひするということですので、このワーキングの役割は大変重いものがあるのかなというふうに改めて感じております。

先ほど、山谷副知事の方からもご紹介がありましたけれども、6月10日の道民検討会議では、かなり活発なご意見が皆様方からありました。全体の印象を申し上げれば、やはり150年という中で、北海道のよさ、魅力、可能性、そういうものをしっかりと次につなげていくという、そういうメッセージがあったのではないかなと思っております。

委員長の方から、私にワーキングの座長ということでご指名がありまして、そのとき私が申し上げましたのは、このワーキングのメンバーというのは、私を除けば、30代、40代という若い皆様方、あ

る意味で次の世代を担う、そういう皆様方に是非将来につなげる議論をいただきたいという趣旨、それから大変幅広い分野で皆さん活動しておられます。そういう分野で多岐に亘るご意見をいただければということ。さらに、北海道内各地で活動しておられる皆さん、そういう視野・視点でですね、この機会に新鮮なアイデアや提言を積極的にいただければ、そんな思いでこの座長役をお引き受けさせていただきました。ということで、積極的に活発な議論を期待しております。よろしく願いいたします。

さて、議事に沿いまして、これから進行させていただきたいと思います。最初に議事の1番目と2番目、会議設置の趣旨、それから150年事業の基本方針及び今後の進め方について一括して事務局の方から説明をお願いいたします。

● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

事務局の岩崎と申します。まずはじめに、本会議設置の趣旨について説明します。

【資料1】会議の設置要綱をご覧ください。第6にありますとおり、「北海道みらいワーキング」は、基本方針の策定に資する事業アイデアや実施手法等について、幅広い検討を行います。本ワーキングと道民検討会議は、相互に連携しながら検討を進めます。

次に、事業の基本方針及び今後の進め方について説明します。基本方針は、事業実施の方向性や、枠組みを示すものとして作成します。この方針に沿って、実行委員会等で個々の事業の検討が行われることとなります。

【資料2】をご覧ください。「基本方針」について、皆様にご議論いただくための検討素材として作成したものです。1の基本的な考え方ですが、「基本理念」では、この度の節目に、これまでの歴史や、先人の偉業を振り返り、次の50年に向けた北海道づくりに継承する旨を掲げております。

「事業の考え方」としては、「151年目の新たな一步を踏み出す」「歴史や芸術などの財産を次の世代につなげる」「各地域の魅力や活力を道内外に発信する」こととしております。

「基本姿勢」として、「未来志向」「価値創造」「道民一体」を掲げております。北海道の過去から未来への時間軸を意識して、北海道の新たな価値を創り上げる取組としたいと考えております。

また、事業を展開する上で、核となるコンテンツが必要と考えます。キーパーソンとして、北海道の名付け親である「松浦武四郎」をお示ししております。参考として、【資料8】を添付しておりますので後ほどご参照願います。

2の事業の構成についてですが、個別事業を大括りで分類しています。右側に記載している個別の事業はすべて例です。

中核事業については、記念セレモニーなどのほか、北海道の偉人やお祭り、うたを活用したイベント、あるいは道外の地域とも連携した事業の実施、さらにはフォーラムの開催などを想定しています。中核事業は、実行委員会が主体となり実施することを予定しております。

連携事業については、実行委員会以外の各事業主体がする事業として整理しています。道や市町村、団体、民間企業等が主体となり、道内各地域での展開や、赤れんが庁舎を活用した開催などを考えております。

事業の実施期間は平成30年の1月から12月までとし、中核事業の実施は夏頃などを想定しております。

2ページをご覧ください。事業の推進体制として、官民の幅広いメンバーで構成される実行委員会を立ち上げることとします。実行委員会が担う業務は、実際には規約等で定めることとなりますが、方

向性としては、事業計画の作成や中核事業の実施のほか、連携事業を登録することなどを検討しております。

次の事業のPR、道民等の意見把握については、この後の議題となっておりますので、後ほどご説明させていただきます。

続きまして、スケジュールですが、本年10月に基本方針を策定します。その後、実行委員会が主体となり、予算規模も含めて具体的な事業計画を検討します。来年29年のできるだけ早い時期に、実行委員会が、事業計画案、予算案を取りまとめ、実施に向けて準備を進めます。こうした動きとあわせて、連携事業を担うことが期待される主体に対して、事業の検討を働きかけていくこととなります。

8には、関連する政策課題とあります。現在、検討が進められているものとして、赤れんが庁舎のリニューアル事業等があります。こうした取組等について、今後、皆様に報告することを検討しております。

最後になりますが、【資料3】今後の進め方(案)をご覧ください。基本方針の検討が、幅広い方々の参画のもとに進められるよう、委員の皆様によるご検討と意見募集などの取組を並行して行うことを図でお示ししております。説明は以上です。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

どうもご説明ありがとうございました。ただ今、事務局の方から説明をいただきました会議設置の趣旨、そして、今後策定を目指す基本方針のたたき台、それから道民からの意見を聴く手続きなど、いろいろなご説明がございました。それからスケジュールの関係も、かなり慌ただしいスケジュールになっておりますけれども、それについてですね、今日は限られた時間でございますので、各委員から順次それぞれご意見をいただければと思います。もちろん、質問も含めてご発言いただいて結構だと思います。

一応、順番にと思っておりますが、曾田委員が早めに退席されるということですので、最初に曾田さんの方からご発言をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

● 曾田委員（北海道教育大学岩見沢校）

曾田と申します。よろしく願いいたします。

私は現在、北海道教育大学岩見沢校で、芸術・スポーツビジネス専攻という、芸術とスポーツをビジネスで取り扱うという専攻の中のスポーツマーケティング研究室というのをやっているのですが、それ以外に、A-bank北海道という多種目のアスリート教育の現場や地域に派遣するという事業をやっていたり、1月からは北海道では一番上位なのですが、なでしこリーグの3部に位置しますノルディニア北海道という女子サッカークラブの経営者もやっております。

自分の特徴なのですが、新しいことにチャレンジするということですか、いろいろな情報を吸収して編集してそれをアウトプットするということ、それから他種目とか他業種がテーマになることが多くて、モノを繋ぐという役割とか仕事をいただいております。

先日6月10日、少し顔を出させていただいたのですが、その時に印象的だったのは、北海道の歴史に対して、クリプトンの伊藤社長が「この100年、50年というのは開拓の歴史ということであったけれども、今はもう開拓という意味では、もうある程度できている。これから、自分達がどのように発信していくのかということが重要である。その中で、自分の得意分野であるインターネットを通じたサービスで何か貢献できれば」という話を仰っていたと思う。私も全く同じ意見を持っておりまして、これ

から何を作るのかということ。私の特徴は先ほどお話しさせていただきましたけれども、その中でも具体的には、スポーツと教育というこの2つの軸になります。ただ、北海道ということになりますと、体育の連絡協議会のようなネットワークのようなものにも入らせていただいているのですけれども、今、北海道の小学生の体力テストの数値が最下位層であるというのと、学習の方も最下位層である。とにかく数値を上げたいということで、このようなワーキンググループでいろいろお話をさせていただいているのですけれども、果たして数値が目標なのかなと、何のために数値を上げるのだらうと。今まで北海道は未開の地で開拓するのが非常に大変で、今のような状態を作ってきて下さった先人の皆さんに感謝をということであったのですけれども、結局これからは「我々はどう生きていくのだ」という意志を持っていかねなければいけないのではないかなと思っておりまして、観光客の方々も、北海道に来たいという理由としては、気候がよい、景色がよい、食べ物がよいという、もちろんアイヌ文化をという方々もいらっしゃると思いますけれども、残念ながら北海道が作った、自分が作った文化に対してのものではなく、自然由来のものに対して興味を持って観光を意識してくださっている方が圧倒的に多いと思うのです。そんな方々は世界中の観光地をまわっていると。ですので、文化の比較というのを世界中で容易にしているような方々がいらっしゃるのです。これから自分達が生きていく意志をもうちょっと込めていかないと、ただ素材はいいけどももっといい場所が外にあるよね、と言われてしまうようなことになりかねないので、なかなか目に見えない部分ですので、どう反映するかというのは非常に難しいとは思いますが、北海道の理念といいますか、理念というのは個人で言うところ恐らく生き方ということとほぼ等しい言葉だと思うのですけれども、それを示していくというのは、これからの50年では必要なんじゃないかなと思っています。

スポーツに関して言いますと、サマースポーツ、特にサッカー、野球。バスケットボールはウィンターの方になると思いますけれども、プロスポーツが増えてきていますので、この二十数年間でこれだけ急成長しています。新しいチャレンジによって、今、継続性を持ってクラブが存続できているのですけれども、北海道のプロスポーツのパワーをもうちょっと込めていきたい。それと同時に、まだまだ改善の余地のあるウィンタースポーツに関しましては、産業としては非常に弱い部分がありますし、今、存続の危機にある種目もたくさんあると思うのですけれども、インバウンドということで考えますと、観光客向けにはウィンタースポーツの優位性が高いと思われまますので、サマースポーツはアジアのリーダーとしての立ち位置、ウィンタースポーツはアジアの観光客の皆さんの楽しみとしてうまく仕組みを作っていくことができたなら、なかなかピックアップされないのですけれども、スポーツという北海道の武器だと僕は思っていますので、それを発信できるような仕組みを、チャレンジを今回この機会に作っていただけたらすごく面白いのではないかなと思っています。ありがとうございます。

● 大津委員（小樽商科大学）

小樽商科大学の大津でございます。よろしくお願ひいたします。

私は小樽商科大学というビジネスを教えている大学ではありますが、ちなみに都市計画を専攻しております。そういう大学の教員でございますので、そういう立場からこのワーキングに参加させていただきまして、そういう視点で、私自身のこの事業、ワーキングへの解釈・理解、スタンスを先に少しお話をしておこうかなと思っています。

都市計画、まちづくりと言ってもよいかもしれませんが、曾田委員も同じようなお立場かもしれませんが、教育、人材育成というような観点では、どちらも、それこそ50年とか100年という非常に長いスパンで目標を立てて進めていくべき事業だと理解しておりますが、昨今、さまざまな公的な事業

ですとか、あるいは大学もそういう状況にございますが、非常に短期的な成果、それから数値といったものを成果として求められると。これはある意味では仕方ないといえますか、そういう時代背景かなというふうにも思いますけれども、なかなかそういう中で、目先のわかりやすい成果だけを求めるような風潮の中で、こういう150年という50年スパンでもの考えるような取組に参加させていただくというのは非常に私にとっては有り難いなと思いますし、この事業の意義の大きさまたいなものを感じてございます。

いわゆる委員会があって、我々はワーキングを構成していますので、あまり理念というところについて繰り返しの議論というのは今後あまりなくてもよいのかなと。むしろワーキングというのですから、より具体的でかつ実効性のある議論を今後皆様と深めてまいりたいと思っておりますし、このワーキングの役割を、先ほど小磯座長は親委員会といえますか、全体の検討会議とこちらのワーキングを繋いでいただくのご紹介がありましたけれども、我々の役割を私自身が自覚しておりますのは、資料の中にも配布されておりますけれども、早速、いろいろな世代の方々からアンケート、ホームページを通じてでしょうか、いろいろなご提案ですとか問題意識、こんなものがたくさん、まだ始めてそんなに時間が経っていないと思うのですけれども、たくさん寄せられていますので、ここをしっかりと、全体の理念をしっかりと確認しつつも、道民の皆さんのこういった声をしっかりと受け止めて取り込んでいくということが大事なのかなと。やはりこれまでの北海道のさまざまな公共政策、いわゆる官、公が中心になってという側面がやや強かった要素、これはあるかと思いますが、まちづくりでも同じことが言えますけれども、市民、道民が自分達のこととして、当事者意識を持って関わっていけるかということが重要なポイントだなと思っておりますので、「記念事業で道が何かやっているな。俺たち関係ないな」というこういう雰囲気はあってはならないと思っておりますので、いろいろな形で参画をいただく。そういう意味では、10日の全体の会議には残念ながら出席できませんでしたが、そこでいろいろなアイデアが出ました。道外の、あるいは世界中から北海道に対するある種の愛着であるとか、あるいはロイヤリティ、帰属意識みたいなものを醸成する仕組みが必要だよなというご意見があったというのは大変勇気づけられておまして、これを是非取り込んだ形で進めていきたいと思っております。

最後に、キーワードを私も考えてみましたけれども、10日の会議の議事録を拝見しますと、やはり多様性、ダイバーシティとダイナミズムみたいなものが非常に重要なのかなと考えております。そういう観点では、北海道はいろいろなものが、いろいろな人達が入ってきて、そこで新しいイノベーション、新しい価値をたくさん増やしてきた150年かなと思っておりますが、残念ながら、今現在、そういう部分ではやや元気がなくなっているのかなと。今後、どういった新しい要素をどんどん取り込んでいって、新しいダイナミックな文化あるいは新しい価値というものを創造していくのか、そこをまた思い出して道民自身が自分達ごととして受け止める、そんな事業のきっかけになればいいなというふうに考えてございます。

冒頭では、私自身の思いみたいなものになりますけれども、もちろん教育という観点でも、北海道の人材育成、人が育つそんな大地になったらいいなと思いつつながら仕事をしているところです。そういう意味で、皆さんと議論を深めてまいりたいと思っております。よろしくお願いたします。

● 折茂委員（北海道バスケットボールクラブ）

みなさんお疲れ様です。レバンガ北海道、プロバスケットボールチームの折茂です。私は代表もやっておりますけれども、選手も兼任しております。

今、冒頭に曾田さんからいろいろお話があったとおり、僕はスポーツに関連することしか発言はで

きないと思いますので、大体、今、曾田さんが言ったとおりの意見を持っています。

僕は元々道外からこちらに来てもう10年経ちますけれども、本当に北海道の良さというものを身に染みてこの10年感じております。その中で、前チームがああいう形で倒れて、僕が存続をすることになったのですけれども、やはり北海道以外でしたら、僕自身がこういう決断をすることはなかったのではないかなと思っておりますし、北海道だからこそ存続したということがあります。

その中で、やはり北海道というところは、日ハム、コンサ、レバンガと3つのプロ球団があると。日本中探しても3つのプロ球団があるところはそうそう無いということを考えると、やはりスポーツに特化した北海道を作っていきたいというふうに私は考えています。にも関わらず、なかなか北海道にいい選手が生まれながらも道外に出てしまうというのが現状かなと思っております。やはり北海道で生まれ育った選手が、北海道の地域に残って北海道のために頑張るといことがあくまで理想であるというふうに思っておりますけれども、現実的には、そこは今達成できていないと。それはどうしてかという、受け入れる場所がない。僕は元々埼玉県出身で、埼玉栄高校という高校。これはスポーツに特化した学校です。体育科があって、その中でもほとんど埼玉県の予選を勝ち上がって、20クラブ以上全国大会に出場するという特化した学校です。北海道にはそういう特化した学校がまずない。受入先がないということが今の状況なのかなというふうに思っております。

我々は北海道、稚内で合宿をするのですけれども、元々我々だけ合宿していたのですけれども、気候の問題であったり、また我々が合宿することによって、大学、また他のプロチームが参加するようになり、非常にインフラ整備みたいなものが整ってきて、稚内にもそういった多少なりの経済効果が生まれたということで。北海道は日本代表の時によく合宿をさせていただいたのですけれども、海外も含めて、日本中から、道民の方はほとんど知らないでしょうけれども、意外と合宿に来ている地域であることは間違いない。それは何故かという、先ほど言ったとおり、気候であったり、食べものが美味しいということが理由のひとつではあると思うのですけれども、我々は、本当にこういったものを道外に発信していきたい。プロスポーツ選手を使っていろいろな道外、世界に発信していくということが重要になってくるのかなと思いますし、最初に高校の話をしましたけれども、実は青森山田という高校はそれで非常に成功している。青森ができて北海道ができないということは間違いなくないので、そういったところから、僕自身も、もっともっと北海道の未来のために、スポーツのためにやっていきたいと。何しろまず北海道はインフラが整っていないので、ファイターズさんも球場問題もいろいろ出ていますけれども、我々も専用のアリーナがあるわけでもないですし、コンサドーレさんもそういったものがないということで、なかなかそういったところも整っていないのかなと。やはり将来スポーツビジネスというのは、日本はまだまだ世界に比べてかなり遅れているのが現状なので、世界レベルに達していない競技がたくさんある。やはり北海道からそういう強い選手をつくり出すためにも、そういったことをしていくべきではないのかなというふうに考えております。

僕自身、スポーツのことしか言えないですし、スポーツのことを言って、それを言うということで僕はここにいると思うので、そういった話をさせてもらって、また皆様のさまざまな意見を聞きながら、僕自身も勉強させていただいて、今後の北海道の未来のために少しでもお役に立てるように頑張っていきたいなと思っております。よろしく申し上げます。

● 河崎委員（作家）

河崎と申します。資料の方の肩書きには作家というふうに書いていただいておりますが、基本的には道東の別海町、知床半島と根室半島の間くらいにある町なのですけれども、人間対牛の数の比率が、

牛の方が圧倒的に多いという、そういった町で、酪農の家に生まれまして、今でも酪農の仕事をしながら、一画で羊を飼育して出荷して、その傍ら小説を書かせてもらっています。今朝も牛の乳搾りをしてからこちらの来た次第なのですけれども、そういう立場なので、皆様と視点が違ったところからお話をさせていただくかもしれないのですけれども、どうぞよろしく願いいたします。

出身は別海なのですけれども、高校は帯広、十勝の方でして、大学は札幌に行かせてもらって、大学を卒業した後に、綿羊の勉強をしたいということでニュージーランドに1年間おりしました。ニュージーランドに暮らしていると、北海道と気候が似ている部分がかかなり多くありまして、まず畜産国家、酪農と牧羊ですね。気候も似通っているところがある。基本、産業が農業。国の人口がニュージーランド400万人くらい。かなり移民も増えているのですけれども。それに対して北海道は500万人くらい。「北海道は聞いたことあるけれども、どんなところなの」と現地の人に言われて、歴史がこうで、サイズがこうで、気候がこんな感じで、例えばニュージーランドがイメージする京都とか東京とかとは違って、産業がこうで民族がこうで、というふうに説明して行って、国のカロリーベースの食料自給率が大体40%のところ、北海道の平均だと200%くらい。十勝っていうところだと1,000%を超えるんだよと言うと、「何で国として独立しないの」というふうに言われるくらい、海外のいろいろな視点から見たときに、北海道というのは日本の中での凄く特異性を持ったところなのだなというのが、自分が海外に出てみて気づいてわかったことです。

それで、北海道に戻ってきまして、文章関係を通じて、特に東京ですね、東京の編集者の方なんかに話をさせていただいたり、私の書いたものはどうしても北海道に関して小説を書くことが多かったものですから、読んで下さった読者の方とお話をさせていただく機会なんかがあると、もの凄く北海道の歴史に関して興味を持って下さる方が多い。例えば、去年出させていただいた本の中で、北海道の長い歴史について書いた部分があったのですけれども、本なので長さの制限もありますので、北海道の開拓のところをスパッと抜けた状態で私が書いたことがあったのですけれども、「そこが読みたかったのに」といろいろな方からお叱りを受けるレベルで、いろいろ興味を持って下さったということを教えていただきました。本州の方でいくと、身内の方が北海道に移住した歴史があるだとか、そういったものとはまた別に、歴史の、明治とかの分岐点の中で、本州から北海道に移住した人達が苦勞して、農業が食物自給率200%の大地を切り拓いたという歴史を知りたいという欲求があるのだなと勉強させてもらいました。

そういった意味で、今回の事業なのですけれども、北海道内の150周年というのはもちろんなのですけれども、対外的に、北海道以外の本州ですとか、もしくは世界に対して向けていくときに、ある意味では、共有している記憶ではないのですけれども、興味を持って頂けるような分野として、「開拓時代」というものがもの凄く重要なコンテンツになり得るのかなというふうに個人的には思います。

松浦武四郎さんをキーワードにということなんですけれども、私もそんなに詳しくはないのですけれども、6回北海道に調査に来たのが、序盤の方は国の事業ではなくて、個人で来ているのですよね。実は別海町の方にも何回か、2回くらいかな、来た歴史がありまして、当時の、江戸時代末期というのは、ロシアの侵攻の危険性があったのと、交易の関係で、まず根室に幕府の機関が置いてあったのですね。根室と野付半島、別海町の一部ですけれども。そのところに松浦武四郎さんが来て、元々ものすごく筆まめでメモを残す、資料を残される人だったということで、野付の人と交流したり、そういったメモとか資料なんかもすごく残っているのですけれども、その一部分から見ても、やっぱり現地の人達、現地の幕府の通詞、アイヌの人との通訳をする人ですね、その中の記憶ですとか現地のアイヌ方にお世話してもらったという資料がもの凄くいっぱい出てくる。

ひとつ思うのが、開拓の歴史というところからスタートしていくと、根室ですとか、開拓使が置かれた部分、屯田兵が置かれた部分というのは時代的にはものすごく早くから発展を始めるのですよ。例えば、北海道でいけば、根室、釧路、十勝、日高とか、そういった点でまず開拓を始めて、その後、それが線に通じていくのですね。それを埋める面という部分がすごく開拓が遅かったという側面があるのです。別海町も実はそういったところでして、例えば、札幌に市電が通っている時代に、まだ道路が開削したてだったと、もちろん舗装になんかなっておりません。砂利道。車なんか通っていない。そういったような時代のギャップみたいなものがどうしても発生していたのですね。そういったものは仕様がなないのですけれども、例えば、今回の事業を考えていくときに、札幌の方だけで盛り上がる、情報が過剰な部分で盛り上がるというそういったものではなくて、北海道の隙間を埋めて一生懸命頑張って開拓を進めた人たちの子孫ですとか、そこに魅力を感じてその後入ってきた普通の人たち、そういった人も巻き込んで、何かワクワクできるそういった事業になってくれればいいなと個人的には考えています。

そんなところで、よろしく願いいたします。

● 津山委員（木古内公益振興社）

道の駅みそぎの郷きこないで、観光コンシェルジュを務めております津山と申します。

木古内町は、北海道新幹線開業ということで、盛り上がってきた町であります。人口4,500人の町なのですが、私のいる道の駅はですね、ゴールデンウィーク中に1日で1万人以上、人口の倍以上のお客様が来館し、1月13日の開業から現在までで、21万人以上のお客様にお越し頂いております。

私は、木古内町の生まれなのですけれども、進学を機に上京して、10年ほど東京で暮らしてきて、4年前にUターンしました。今回、150周年記念事業というこの場で、たった4年間のお話をするのは大変恐縮なのですけれども、この4年間が木古内町の転機になった年でありまして、最初に私が戻ったときは、新幹線が来たからといって、町がどう変わるんだというすごくネガティブな空気が漂っていたんですね。実際に青函トンネルが開通したときに、町は一瞬は賑わったけれども、どんどん衰退して行って、結局何の得もない、じゃないのですけれども、そういう方がすごく多かったのですけれども、この4年間、そうは言っても北海道新幹線は来てしまうと。100年に1度、この小さな町が注目を浴びる100年に1度のチャンスだということで、道から派遣の職員の方が来て下さって、いろいろな計画、食の磨き上げですとか、観光資源の再発掘ですとか、いろいろなことをやってきたのですけれども、一番は、計画もやっていたのですけれども、みんなが汗をかいて、道から出向してきてくれた職員の方でしたり、役場職員、商工会の皆さんも、一体となって本当に木古内をPRしなければならないというその1点に集中していったんですね。いろいろマスコミに出させていただく機会もありまして、私はですね、全国放送で新幹線の特集の番組に出させていだいて、「最後に、木古内の何をPRしたいですか」と言われたときに、私は緊張してしまって、「私たちに会いに来て下さい」と言っちゃったんですよ。もっと、「木古内と言えば、これを食べに来て下さい」とか、「これを見に来て下さい」とか、そういうことを言わなくていいのと言われて、失敗しちゃったな思ったのですけれども、実際に北海道新幹線が開業して、道の駅がオープンしたところ、たくさんのお客様が、「木古内って頑張っている町だなと思ったんだ。それで応援したくなって、来てみたくなったんだよ」って言う方がすごく多いのですね。私自身は失敗したと思った発言が、「会いに来たよ」って言うていだいて、本当にびっくりしているところなのですけれども、本当にこの4年間、何を感じたかといいますと、「思い」のある行動というのは、人の心を動かして、さらに人を動かす、実際に木古内に足を運んで下さる方が

多いということ、すごく学んだところです。実際に、町もたくさんの方が外から来て下さるところを見て、みんな改めて自分の町に誇りを持って、木古内っていい町なんだなというふうに発言する方がすごく増えてきて、町が明るくなってきたんじゃないかなと嬉しく思っています。

もうひとつ、私がこの4年間で刺激というか衝撃を受けた出会いが、津軽海峡まぐろ女子会という、青函の女性たちでつくった地域おこし団体なのですけれども、私はいつの間にか会員になっていたのですけれども、とにかくパワフルで面白い団体であると。おもてなしツアーという企画を自分達でしまして、その地域の魅力にスポットを当てるのではなくて、その地域の人にスポットを当てて、おもてなしマグ女、男性の方はマグ男と名付けて、人にスポットを当てたツアーを設定したのです。地域に住んでいる人にスポットを当てると、その人は、そこで暮らしていて楽しい。そこで暮らして、その町が好きだから暮らしているとか、そういう人にスポットを当てると、自然とその地域の魅力が伝わってくるいいツアーになったなと思っているのですが、この津軽海峡まぐろ女子会の中で、時々マジメな話をする機会もあるのですけれども、よく話すのが、とにかく楽しんで行動しよう。そして、私たちがキラキラ輝こう。キラキラ輝く姿を子どもたちに見せることで、自分の町に誇りを持って、この町ですずっと暮らしていきたいなと思ってもらえるように私たちが見せていくことが目標だね、という話をするのです。田舎より都会の方がキラキラ輝いているという、特に若い方たちにはそういうイメージがある方が多いと思うのですが、確かに、北海道、東京、青森、色は全然違うのですけれども、その地域の色、カラーを変える必要は全くないのですが、その地域の輝きをもっとさらに磨いていくことはすごく大切なことなのではないかなと感じております。

具体的な話があまりできなかったのですが、北海道がさらに輝いてくことに、私もこの場で勉強させていただいて、私も頑張っていきたいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

十勝から参りました北海道ガーデン街道協議会の会長をしております林と申します。まずもって遅刻してすいませんでした。30分に札幌駅に着いて、10分前にはこの下にいたのですけれども、おっちょこちょいで、道庁赤れんがはどちらですかと聞いて、往復してしまいました。

私は、北海道ガーデン街道というものを2009年に立ち上げました。正直申し上げますと、十勝は農業は非常に強いのですけれども、観光は非常に弱かった、まだまだ弱かった。それで、ガーデンを作ったのです。千年の森という。そうしたところ、営業に行きました。東京を中心にですね。そうしたら、十勝には見るところがないので、お客さんは送れないよということで、これは道を作らなきゃいけないなと思ひまして、感動の道、これはやはり富良野だろうと。ということで、富良野と旭川を連携させて、飛行場と飛行場を結ぶことで、観光の道ができるのではないかとということで、ドイツのロマンティック街道又はイギリスのコッツウォルズ、湖水地方をお手本にして、ガーデン街道を作りました。お陰様で、2009年、延べ人数が、7ガーデン、今は8つあるのですが、当時35万人のお客様が今では60万人ほどまで増えてきております。そういった意味で、私からは、観光だったり、インバウンドが増えておりますので、また地域連携、そういった視点からお話をさせていただきたいと思っています。

皆さんご存じのように、インバウンドは150万人を優に超える方々が北海道にいらっやっています、オリンピックの年までには（日本全体で）3,000万人、恐らく10%近くは北海道に来ると思いますので、250万人から300万人の方々がわずか4年後に訪れると思っております。今回、テーマが武四郎さんということで、私、北海道ホテルの専務をしております、北海道ホテルのエントランス付近にはですね、武四郎さんの地図がたくさん飾ってあって、非常になじみ深いのですが、武四郎さんも開拓

の実績というのものはものすごいのですが、私最近ですね、さらに2年後の長官の黒田清隆さん、そして、その黒田清隆が当時のアメリカの農務長官ホーレス・ケプロンさんと呼んで、そこで北海道大学を作ることを進言したり、米だけではなく麦も重要だと進言して、それがサッポロビールさんに繋がったりですね、今、インバウンドがたくさん増えて、第2期のグローバリズムになっているのではないかなと思うのですが、やはり最初の初期はホーレス・ケプロンさんがグローバリズムをしっかりと確立したからこそ、この北海道が発展したのではないかなと私は今強く思っております。そういった意味で、武四郎さんも重要なのですけれども、私は更に、開拓期からすぐに成長期に、北海道はわずか2年間で進んだのだと思います。それが、繰り返し言いますが、ケプロンさん、そしてクラーク博士に繋がっているのが重要な観点ではないかなと思います。そう言った意味で、繰り返しお話ししますが、今まさにグローバリティであるとともに、もう一度、ケプロンさん、そしてクラーク博士がナレッジ、知識をグローバル視点でたくさん注入をしていただいた。まさに今、第2のグローバリティが北海道、日本全体にありますので、それをどう知識に変えていくか、ナレッジに変えていくかというのは、非常に重要なことだと私は思っております。

大体ですね、教育って、社会の勉強をするときにですね、子どもが今10歳でして、どうしても縄文時代とかですね、一番最初から入ってしまうのですね。近現代史までたどり着くのに結構時間がかかるのですけれども、当然ながら縄文時代のことも重要なのですけれども、近代のことも非常に重要だと思います。そういった意味で、武四郎さんも重要だけど、どうしてここまで北海道が発展できたのかということは、今回の、道庁さん主体ですが、もう一度その観点をしっかりと見据えてですね、今後の論議をしていきたいですし、私もいろいろな形でご意見をさせていただきたいと思っております。ということで、第1回目ですが、引き続きいろいろな観点からお話をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

● 山崎委員（男山）

旭川で日本酒を作っております、男山の山崎五良と申します。今日はよろしく願いします。

私は、この話をいただきましたときに、まず真っ先に考えたのはですね、こういう何周年イベントというのを昔自分がどういうことを経験したのかなというふうに思いまして、小学校1年生のときに100周年記念という式典がありまして、あとは前に東京で働いていたときの会社で何十周年というパーティーみたいのをやって記念品をもらったりとか、そういった2回かなと思っております、小学校のときも結構大々的な、小学校は内輪だけですけども、そういったイベントを経験しています。今回、それしか経験がないので、150年ということで、これは基本姿勢の「未来志向」、「価値創造」、「道民一体」ってあるのですけれども、特に「道民一体」というところに力を入れた方がいいのかなと個人的に思っております。と言いますのも、北海道が150年だから海外のお客様が来てみようと思うかという、またそれは別の話であり、例えば青森が150年だから私たちは青森に行きますかという、またそれも違うのかなと思ひまして、北海道の人たちで一体になって盛り上げていくというのに重きを置いたらなというふうに思っております。ちょっと内輪的な自己満足でもいいのかなと、北海道の人がいいなと、なるべく多くの道民の人が楽しいな、150年になったということ、林さんの話にあったとおり、歴史を振り返ったり、そういったことで北海道の人を重視して、それが結果として「北海道、楽しそうだな」と他の都府県の人たちが思っております、北海道に来るとなれば最高ですけども、まずはやはり我々道民がいかに150年というのを祝いするのか、盛り上げるのかというのが大事かなと思っております。

具体的には、世代ごとにアプローチというのは非常に大事ななと思っております。60歳、70歳の方々に200年について語っていくよりも、やはり若い世代、例えば小中学生に北海道の歴史の授業の時間をもらったりとかですね、そういったことで、なるべく若い世代、これからの50年を生きる世代の人たちに北海道の魅力、北海道のすごいところを伝えていけるようなことを何かできればと思っております。

こんな感じでよろしく申し上げます。

● 吉田委員（桐光クリエイティブ）

桐光クリエイティブの吉田です。私は、この会議に参加させていただいて、是非皆さんと一緒に成し遂げられたらいいなと思っていることが2つあります。

1つは、今こそ「北海道が世界にこれを提供します」ということを言えるということ、言える北海道にするということ。

それからもうひとつは、価値を考え続けて、「価値を生み出すことができる仕組み」を残すこと。一番嫌だなと思っているのが、150年、ああ150年だ、こういう北海道だったよね、よし頑張ろうという決起大会で終わるということが一番恐ろしいことだと思っています。

私の仕事はプロモーションがメインです。北海道もそうですし、札幌市もそうですし、今は遠軽町とか剣淵町とか、どうやったらその地域の価値を伝えて、そこに人を呼び込み、ブランディングしていくのかということの日々、日々、考え続けています。お客様には企業もいますし、大学もいますし、あらゆることなのですけれども、やっていることはただひとつなのですね。本当に伝えるべき価値は何なのかということと一緒に整理して、それをいろいろな手法で展開して、伝えたいターゲットというものを整理して、成果を出す。ただそれだけなんです。

私は、ずっと、北海道の観光審議会でも磯先生と一緒させていただいたり、商工審議会にも出させていただいたり、いろいろな会議に出させていただいて、いつも申し上げているのは、本当に伝えるべき価値って何なのかというのを、もっと真剣に考えませんか、ということなんですよね。みんな、何となくいいところはいっぱい知っているけど、じゃあ皆さん、誰かに「北海道ってどんな場所ですか」と言われたときに、ひと言で言えるのでしょうか。ひと言じゃなくてもいいのですけれども。といった時に、なかなかその価値が、自分達がストーリーで語れないのではないかとずっと思っております。それが実は、北海道だけではなくて、企業もそうだし、大学もそうだし、私もそうだし、どっちかという道民性かもしれないですね。何となく漠然としたまま生きてしまっている。なので、ここを本気で、それこそ松浦武四郎さんから、先ほどの話もみんな価値ですよね。それを本気で掘り下げて、本気で整理して、カテゴリーでまとめて、この中からキーワードを見つけるのは、150年は最高の機会です。でも、これを逃したらもしかしたら私が生きているうちは無理、200年まで無理なのではないかと思っています。なので、すごく大変だと思います。ひとつの企業の価値をみんなで強みを検討しながらプロモーションを迎えるまで最低半年かかります。2年間って短いと思うのですけれども、これだけのメンバーが、検討委員会の方も素晴らしい方達がいらっしゃいますし、道を挙げてですので、本気でやったらできるのではないかなと思っています。2年後にできなかつたとしても、さっき申し上げた仕組み、例えば150人のキーパーソンを選んでもいいと思います。この価値を語れて、これから創り上げられる150人のキーパーソンというのを選ぶことができたなら、その人たちは、あと50年ぐらい頑張れると思うのですよね。中には10年、20年かもしれないけれども、若い人だったら50年頑張れるかもしれない。というふうに、例えば人の仕組みを作る。それから、手法は多様ですよね。いろいろな

ことができるので、積み上げてきた価値というものを、何とか後世に残す仕組みを作る、これができる
と、150年で全てやろうというのは無理かもしれないけれども、何のための150年事業かということが
ハッキリしてくるのかなというのを、まさに皆さんの価値のお話を聞きながら思っていました。以
上でございます。

● 山谷委員（北海道）

皆さん、それぞれのお立場から大変素晴らしいご意見を頂戴したなと思って、この会を開いて良か
ったな、一日も早く開きたいというふうに思っていたのを、開いて良かったなというふうに思いま
した。

役人って、予定調和なんですよ。何かやると決めたら、こういう形というのを最初に描いて、あま
りみんなから批判されない形、それに向けて全部作っていくので、弾けるということがなかなかでき
ない。でも、やっぱりこの機会に、先ほどから皆さんのお話にあるように、失敗してもいいのだと思う、
失敗しても思いが伝わる、失敗しても次の時代に伝わる、そういうのをこの機会には目指さなきゃい
けないのではないかなと思います。結構うちの若い連中が燃えているのですよ。毎回ペーパーが変わ
って僕のところに持ってくるのだけど、それはそれでいいと。それで、我々も本気でそれをやろうと。
だけど、僕らはどうしてもある一定のまとまりにしてしまう。まして、価値を生み出すとか新しい仕組
みを作るといえるときに、正直言うと躊躇する。それを、やはり民間の皆さんと一緒にやって、「いいじ
ゃん、やろうよ。私たちがやるから、やろうよ」というのを、150年に目指すことができればいいな
というふうに思って、1日も早くこういう会議を開きたいと思っておりました。今日は、皆さんそう
いう方向でご意見を頂戴しているので、大変嬉しく思います。ただ、我々もその覚悟でやらなくては
いけないと改めて思うところでありました。どうぞよろしく願いいたします。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございました。副知事からの覚悟の誓いを確認させていただきました。

私も一応委員ということで、先ほども少しご紹介しましたけれども、先般の道民検討会議の中で、私
自身はやはり150年という節目の取組の意味をひと言で言うと、「過去と未来をしっかりと繋ぐ」大事
な節目であると。人間って、ややもすると145年や146年では、その時期にそれまでのことをしっ
かり振り返るといえるのはなかなか難しい。それを次の世代に繋ぐために、ある意味で過去を、
知られざる過去をしっかりとこの機会に見つめ直し、もし知られないまま、そのまま時代が過
ぎてしまうと、実は地域にとっては弱いことで、それをしっかりと伝えていくという、そんな
意味合いが、150年という節目の意味なのかなというふうに感じております。

そんなことで、前回の検討会議ではですね、私自身は個人的な立場としてはこういうことを
申し上げました。私は地域の開発政策というものを専門にしております、私も実は北海道に
憧れて移住してきた者なのですが、それとともに、北海道に憧れた魅力のひとつが、この
地域の歴史なのです。これだけの近代国家になって、150年も経たないこれだけの間に
これだけの地域を作り上げた、その政策の背景って何なのかなと。そこにはもちろん、
光もあれば陰もある。ただ、それをしっかりと北海道民がひとつの伝統として誇り
を持って語れるような、そういう地域が素晴らしい地域なのではないかなという、
そんな思いを持っています。

先ほど林さんからお話がありましたけれども、北海道の近代国家に向けてのスタートとい
うのは大

変厳しい時期でした。当時、少し前は中国大陸が列強に支配されてアヘン戦争で負けると。あれだけの中国が植民地になってしまうという危機感の中で、ロシアの列強としての侵略にどう備えていくのかという緊張感の中で始まった北海道の近代国家づくりという、実はそういう背景の中でどういう政策がこの地域で行われてきたのか。ややもすると、第二次世界大戦、戦争というところで、その前と後ろで切断されたような見方もあるようなのですけれども、実はそこは脈絡として繋がっているという。そういう歴史というのが、本当に北海道の地域の中に伝わっているのか、北海道民がそれを共有して、それを次の世代に伝えていけるのか。そういう意味では、地域教育のあり方とか、そういうものも含めて、そんな取組を私自身の立場からこの機会に少し心がけて取り組んでみたいなと思っております。決して、これを北海道庁にやってくれとか、記念事業で、ということではなくて、そういう思いをそれぞれの立場でしっかり自分自身で確認して、この機に何をするのか、そういうのを考えていく機会、それがこの150年という事業の意味ではないのかなと個人的に思っておりますので、ご紹介をさせていただきます。

さて、一応、限られた時間での議論ということでございますので、今後、基本方針の素案の作成というのを事務局の方でしていただきます。今日皆様方からいただいたご意見、それをできる限り斟酌して、基本方針の素案作成に向けて、事務局の方で作成をお願いしたいというふうに思います。

この後、少し時間があれば、その関連でご意見をいただきたいと思いますが、議事の方の進行を次に進めさせていただければと思います。

議題の3番目になります「道民等の意見募集の実施について」ということで、この状況について事務局から説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

道民等の意見把握については、【資料2】の2ページの6で3点記載しております。事業アイデアなどいただいたご意見や、作文の趣旨については、可能な限り基本方針への反映に努めたいと考えております。

【資料4】「作文募集」についての要項をご覧ください。6月11日から、道内在住の15歳から25歳までの方から「北海道の未来」についての作文を募集しております。

これに関連して、【資料5】作文の審査方針の案をご覧ください。

審査基準案に基づき、5つの観点をもちながら評定することを検討しております。

審査は、この基準によりまして、段階的に行うこととし、多くの審査員の目で絞り込んでいきます。

次回の第2回北海道みらいワーキングでは、各テーマ5作品についての委員の皆様への審査結果の集計をもとにご議論をしていただき、各テーマの最優秀作文を選定することを検討しております。

なお、選定した最優秀の作文については、8月上旬に開催予定の第2回道民検討会議において、ご本人による発表の時間を設けたいと考えております。

続きまして、【資料6】アンケート実施に係る資料をご覧ください。これも同じく6月11日から、ウェブサイト上で、事業アイデアやご意見を募集しております。

関連して【資料7】「アンケートの実施状況」をご覧ください。先週末時点の集計結果について整理したものです。件数は20件です。説明は以上です。

● 小磯座長（北海道大学）

どうもご説明ありがとうございました。ただいま、資料4から資料7に沿ってご説明をいただきま

した。これについての、ご質問でもご意見でも、どなたからでも結構ですけれども、ございましたらご発言をお願いいたします。

● **河崎委員（作家）**

「北海道みらい日誌」についてなんですけれども、この募集はどのようなかたちで行っているのでしょうか。学校に声をかけるとか、インターネットで示しているとか。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

こちらの募集要項につきましては、事務局のホームページで掲載をさせていただいております、それとは別に、各学校に対してご案内をしている状況でございます。15 歳から 25 歳ですので、高校、大学が対象になってくるかなと思いますけれども、それぞれ個々にご案内をしているところでございます。

● **小磯座長（北海道大学）**

手応えはどんな感じですか。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

これから、というところです。

● **小磯座長（北海道大学）**

作文審査に関して、ワーキングの皆さんに関わっていただくとのことですが、その辺の具体的な関わり方、イメージがあれば、ご説明をしておいた方が良いと思うのですが。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

審査の方法については資料 5 の 3 になります。「審査手続」とありますが、現在作文募集ということで、7 月 10 日までの募集をかけているところです。事務局で、いただいた作文について一次審査を行って、3 テーマありますが、各テーマそれぞれ上位 10 作品を選びます。二次審査とみらいワーキング審査、こちらのワーキング委員の皆様にご審査をさせていただいて、各テーマ 1 作品の最優秀の作文を選出したい、という考えでございます。

● **大津委員（小樽商科大学）**

確認のような質問ですが、「道民等の意見把握と反映」ということで 3 つ実施をされると資料 2 にあります。アンケートについては、先ほども少しありましたが、既に 20 件ぐらいということで、道民の考え方というか、150 年の認識の状況を把握するという観点かなと。3 つめの基本方針の意見募集は、このワーキングや検討会議で作成した基本方針に対する道民の意見募集と。要は 150 年に向けた今後の、あと 2 年なのか、そこに向けて意見を反映させるという観点かなと思いますが、作文の方ですけれども、狙いとしては、道民の意識を喚起するとか、あるいは、若い世代に関心を持ってもらうという意味で、このタイミングでのみ実施をしているというイメージでしょうか。この 1 回でもうやらない？

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

後のことについては固めていませんけれども、まずは基本方針の作業の一環として考えているところでございます。

● **大津委員（小樽商科大学）**

学校単位で取り組むとか、高校・大学なので小学校の作文みたいなものとは違うかもしれませんが、ここで自分の思いを込めたものが、どんな風に反映されていくのかというイメージが、現時点では持ちづらい部分があるのかもしれませんが。既に募集を開始している段階だと思いますけれども、検討会議で優秀作品が発表されることに加えて、何か、せっかく集まってきた道民の思いですので、それが何か形にされて表現されるような活用というか、事業全体の中での活かし方、膨らませるような進め方を是非に。私自身はそう思います。

● **小磯座長（北海道大学）**

大変大切な問題提起だったと思います。できれば、せっかくの機会ですから、単に最優秀賞が発表された、ということだけではなくて、せっかく寄せられた道民の 150 年の記念事業への思い、それから提言、場合によっては創造的なアイデアも含めて、それをどういう形で固めていけば良いのか、そこは是非工夫して検討いただければと、私からもお願いさせていただきます。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

今の小磯先生の話にも繋がるのですが、基本方針は、「未来の姿を見据えます」「新しい価値を創ります」「価値を共有します」とあるのですが、ここは 150 年までにある程度提示するという考え方で良いのでしょうか。それとも、「あとは皆さんで考えてください」ということなのか、ここはすごい重要だなあと。作文をどうするかにも繋がるのですが、私たちは、あくまでも「こういうことをみんなやっぺいこうね」と言うだけなのか。私としてはそれではダメだと思うのですが、この 2 年間、基本方針に基づいて何らかのかたちで道としてのスタンスというかメッセージというものを道民に発信されると考えてよろしいのでしょうか。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

そのとおりです。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

では、今後何らかのかたちで、新しい価値や未来の姿をどうやって提示していくかということはこのワーキングで議論できることでよろしいですか。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

はい。そのとおりです。

● **小磯座長（北海道大学）**

あとはいかがですか。よろしければ、事務局から説明があったような方向で進めていくと、基本的にはご了解を得たということで確認をさせていただきたいと思います。

それでは次の議事です。4番目になります。「事業PRについて」、説明をお願いします。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

【資料2】の2ページの5をご覧ください。事業の実施に向けては、まずはこの事業の取組を広く知っていただくことが大切と考えております。

キャッチフレーズについては、さきの道民検討会議で、例として、北海道の新しいキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」を活用することについてもご説明させていただきました。チラシを参考まで配付しております。これを活用することについて評価するとの委員のご意見もあり、事務局としては、有力な候補のひとつと考えております。

ロゴマークについては、PRだけではなく、事業に参加する方々の一体感を表すシンボルとしても必要と考えております。公募なども視野に入れながら、年内を目途に作成したいと考えております。

なお、情報発信の具体のツールとして、ホームページに加え、SNSを上手に組み合わせた活用が重要と考えております。皆様からは、事業のPR戦略等についてご意見を頂戴できればと考えております。以上です。

● 小磯座長（北海道大学）

ご説明ありがとうございました。ただ今の事務局の説明は、一つはキャッチフレーズ。これについては、既に作成されている「その先の、道へ。北海道」を評価する声も親会議であったということで、事務局としては有力な候補として考えているというご説明。それからロゴマークについては、今後公募も視野に入れながら年内を目途に作成していく、そういうご説明がありました。これらについて、いかがでしょうか。

● 吉田委員（桐光クリエイティブ）

おっしゃったように、まさに戦略が大事、設計が大事かなと思っていて、ホームページもSNSもポスターも全て手法なのです。どんな手法でも良いですし、今はいろいろな手法があるから効果的に発信することはできるのですけれども、問題は、「何を」、「誰に」伝えるかということ。これが根底になると、予算の無駄遣いになりかねないかなと思っているので。総予算がありますので、総予算の中で、このフレーズをメインにするのであればメインにするとして、どんな価値を、誰に対して、いつアピールするかというのを、方向設定を先に持てるというのをやった方が無駄がないし、しかも2年間という時期ですので良いかなと思うのと、あと一つ整理した方が良いかなと思っているのは、今ここで使われている「PR」という言葉は、「連携事業をPRしましょう」、「事業PRを強化する」と、「事業」というものが何を指しているのか。「北海道150年」ということなのか、「北海道150年でこういうイベントをやりますよ」と言っているのか、それとも、根本的に「こういう北海道を共有しましょう」というPRなのか。これらは全く、一体のようで一体ではないはずなのです。なので、何に対して、誰に対して必要なPRをするのか、これだというのを一枚図というか、それがすごく重要なかなと思います。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございます。基本のご指摘だと思います。吉田さんのおっしゃった、「事業」についての解釈と言いますか理解と言いますか、これはすごく大事なところで、150年の記念事業という、これから出てくるものは「北海道」として、一つの運動というような、大きなメッセージというのが一つあ

るかと思いますが、それとともに、「北海道庁」としてこういうことをやりますという道庁としての事業もある。それに対して、いろいろな関係機関に対して、「こういう取組を」という呼びかけもある。その部分が、一つの「事業」という言葉で括られてしまうと、ちょっと見えなくなる部分もあると、そんなご指摘だったのかなと思って聞いておりました。逆に言うと、その辺の懸念がないような整理を心がけていただければというふうに思います。

あと、いかがでしょうか。

● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

私も、道庁さんというか、委員として、いろいろなアドバイスなどをする機会をいただいて、だいたいこういう機会のPRは、つまらないものになってしまっていて、まとまってしまっていて、やった意味があまりなかったなということが結構多いのですけれども。そういった意味では、北海道は150年ですけれども、他の都府県はもう少し長い歴史があって、そこで、例えば「お手本になる県があったね」ですとか、それを見れば「これ良いね」と言えるような、「可視化の共有」というようなものがあると進めやすいなと思います。今はただぼんやりとしているので、この件は全て真似が良いとは思いませんけれども、「こういったところを参考にしたい」とか、別に海外でも良いと思います、プロモーション上手なところの。「こういうところはこういうことをやって、YouTubeを使って300年プロモーションしましたよ」とか、そういうものでも良いのですが、情報が無い。生産性を上げるには、情報・知識、そしてパートナーシップ。それ以外もあるのですけれども、その2つを重要視しないと、何か内々でやってしまうと、どうしても真面目になってしまうので、「遊び心」をしっかりと持った、それが良いのかどうかわかりませんが、我々世代と言うか、20代30代の未来を見据えて、楽しい北海道を作っていこうということになれば、それなりのものが必要なのかなと思いました。

● 小磯座長（北海道大学）

今の林さんのようなご意見がこのワーキングの役割で、私はともかく、皆さん方の斬新なアイデアで、盛り立てていくということを期待しております。

後はいかがでしょう。よろしいですか。

では、基本的には、各委員からのご発言があった内容を踏まえて、事務局の方で整理をして進めていただく、ということで確認をさせていただきたいと思います。

予定された議事は以上ですが、最初の集まりでもありますので、せっかくだから、全体を通して、「こういうふうに思っていたけど、各委員の発言を聞いているとこういう取組も必要ではないか」ですとか、基本的な指摘でも結構ですので、あとは自由にご意見をいただければと思います。

● 大津委員（小樽商科大学）

先ほど吉田委員から発言のあった、「仕組みづくり」は非常に重要だなど。当然、「事業」というのは、150年事業、関連でいろいろあるかもしれませんが、役所的な意味での「事業」なのかもしれませんが、150年を迎えて、華々しくやったけれども、何か枠組みと言いますか、仕組みのようなものが何も残らなかったでは、何のためにやるのかなと思いますので。何を申し上げたいかと言うと、任期はいろいろ決まっているのかもしれませんが、150年の時に予算的には一時的に強化されるのかもしれませんが、継続的にその後も進めていくような、それは役所の機関なのか、民間と取組なのか、あるいは大衆的な取組なのかもしれませんが、そういうものを構想していくというのが、方針の中では、現時点で

はあまりビジョンに入っていないのかなと思います。

このあたりについては、検討会議でのご意見なども含めて、150年以降の、どんな枠組みを見据えられるか、検討会議での状況なども話題提供をいただけると、150年の先のことも考えて良いのだなと思えるので。151年目が大事だという意見も出ていたようなので、そのあたりのことを是非聞きたいなと思いました。せっかくなら、皆様のご意見をいただきたいなと思いました。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございました。まず、事務局としてはどうでしょうか。その辺のお考えがもしあるのであれば、最初にお伺いしておきたいと思います。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

先ほど、山谷副知事から「予定調和になりがちだ」とのお話もありましたので、大津委員からのご指摘も踏まえまして、そういった声があれば、事務局として柔軟に検討をして、皆様にご意見をいただければと思います。記念すべき 150 年の先を見据えてということでやっていくのですから、そこについての言及は、個人的にはあっても良いのではないかと考えております。

● 大津委員（小樽商科大学）

それも良いのであれば、いろいろなご意見が出るでしょうし、先ほどの折茂さんの、スポーツに特化してという、北海道の特徴を活かしたような教育の仕組みですとか学校ですとか、「ちょっと弱んじゃないか」ということも含めて、それはどんどん出しても良いということですね。

● 山谷委員（北海道）

まだ漠としている話ではありますが、去年ですね、マサチューセッツとの交流 25 周年記念で向こうへ行って、調印をしてきました。まさに、先ほどお話しがありましたホーレス・ケプロンであり、クラーク博士であり、そこで、向こうの知事さんと会って「Boys, be ambitious!」の話をしたのですが、向こうの方は「知らない」と。それで、「とっても良い言葉だ。次の選挙は『be ambitious』で闘おう」なんて話あって、これから更に絆を深めようというお話になりました。で、「知事さん、150年の時には是非来てください。」と、勝手に約束をしてきてしまいました。

さて、それをどうしたら良いのか、というのがありますが、多分、行政として、ある一つの形をもった行事・式典というのはどこかでやるのだろうなあと。でも、それだけで終わってしまったら、先に続かないなあと。それで、先ほどおっしゃっておられたいろいろな価値を生み出す、仕組みを生み出す、そういうことを考えていって、「150年までに何か一つの形をつけるもの」、それから、「150年をスタートに」、若しくはその前から準備をして、華々しく「さあ皆やろうね」と準備をして、「150年を契機として」そこから未来に向かってやっていくもの、それは、いろいろな分野に関わってくると思いますので、皆様からもアイデアを頂戴して、道の施策と絡むものは道の施策と絡めて、各分野で、人づくりやスポーツなども含めてそういう仕組みづくりをやって、新しい道の施策として展開していこうと。

それから、民間の皆さんにやっていただくものがあれば、これも一緒になってやる仕組みを、ある意味これまで繋がっていない地域や人たちを、この機会にお互いに連携して次の時代を作っていこうと、そういうことができるのであればやりたいなと思っています。まさに、これが、プラットフォームとして、皆様からいろいろなアイデアを頂戴して道民に発信をしていく。その発信を効果的に、どうい

ふうに繋いでいったら良いか、まさにそれも戦略なのだろうなというふうに思いますので、その辺も知恵を頂戴しながら。

実は、正直に言います。現時点で予算はありません。これから皆さんにアイデア頂戴して、必要な予算をしっかりと確保しながら進めていきたいと思っております。現時点ではそんなところではありません。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございました。今、大津委員から問題提起があったお話については、まだ事務局の方も頭の柔らかい状況だと思いますので、そういう意味では、良い意味で、例えば150年を契機に、新しいこういう政策が始まったとかですね、そういう取組が北海道の政策に出てきても面白いと思いますし、そこは、逆に言うと皆様方の意見の中で、道民検討会議も含めて、前向きな意見が出てくれば、受け止めていただくように我々もお願いをしていく、そういう前向きな議論に繋げていければ良いと思います。

あとはいかがでしょうか。

● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

率直な意見を言うと、この資料を見て、松浦武四郎のお話をすれば良いのかなと思って来ました。ただ、皆さんのいろいろなお話を聴いていると、自由な発想をして良いのだなと。そういった意味で、私も、先程来十勝の話をしていて、十勝も農業、酪農が強くて、あまり観光とか、プロモーションはどちらかと言うと下手だなあとずっと思いつつ、その中でいろいろと勉強をしてきて、シビックプライドだったりシティプロモーションだったり、ヨーロッパとかアメリカとかいろいろ行かせていただいているのですけれども、非常に、そういった意味では、皆をやる気にさせる力というか、マチを通じて一つになるという意味では、本当に上手にやっていると思います。

こういったことを言うと失礼かもしれませんが、頭を柔軟にしないと、先程来副知事がおっしゃっているように予定調和になりがちになってしまうと思いますので、世界から学べるような、そして未来を創れるようなかたちにしていただきたいですし、それに対しての意見は積極的にさせていただきたいと思います。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございました。そういう意味では、私からの提案ですけれども、そういった前向きなアイデアというのは、多分このワーキングだけではなくて、こういう事業を広めていくと、北海道内いろいろな場でいろいろな方々から出てくると思うのですね。そういうのが、例えば、北海道庁はお金がなくても、ちょっと支援しますとか、いろいろなかたちがあって良いと思いますけれども、そういうのをかたちにしていくような仕組みづくりも、基本方針の考え方の中にしっかり盛り込んで、あまりタガをはめてギリギリ絞り込むような議論よりも、良い意味で皆さん方が前向きに参加できるような、そういう取組を是非目指して行って欲しいなと。それが今日の皆さん方の思いなのかなと思いましたので、私からもよろしくお願ひしたいと思います。

● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

お手本というか、モデルができれば、それを真似て、都市ごとに「私たちもこういうことをやろう」

と伝播していくと思いますので。

● **小磯座長（北海道大学）**

それは十勝が最たる地域だと思いますので、是非頑張ってください。

私も先ほど申し上げましたが、自分自身で何ができるかというところから議論をしていくことが大事だと思います。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

小磯先生がおっしゃったことがすごく私も良いなと思っていて、実は広報戦略と事業戦略は一体であるべきなのですね。どれだけ多くの人を巻き込むかということだと思うので、小磯先生がおっしゃった手を挙げさせるというのはすごく良いと思っていて、特に民間、「150万円あげます。あなただったら、北海道の価値を継続的につり上げていくどんな提案がありますか」と、プロポーザルにかけるとか、それをやれば良いじゃないかと。別に2年後になくなっていても良いと思うのです。150万円って、そんなに大きくはないけれども、一步踏み出すにはちょっと背中を押してくれる金額ということで、いろいろなジャンルの人たちが手を上げるかもしれない。それがもう広報なのです。そういうことを早めに、いくつかの軸になる事業と広報戦略を一体化したものを早めにやることかなと思います。

● **小磯座長（北海道大学）**

ありがとうございます。だんだん議論が盛り上がってきましたが、これが良い意味でのワーキングの役割ではないかなと思います。

あとはいかがでしょうか。折茂さん、何か具体的なアイデアなどがあれば。

● **折茂委員（北海道バスケットボールクラブ）**

あまりこういう会議に慣れていないものですから、先ほどお話ししたように、仕組みが一番大切だと思います。いろいろなスポーツの世界であっても、仕組みができていないと、未来に繋がっていけないケースがあるので。

実は、「松浦武四郎」さんを私は知らなかったのです。大変失礼かとは思いますが。道外から来た人はなかなか知らないのではないかなと。では、今の若い世代の人がどれだけその方を知っているのかという、ちょっとクエスチョンになってくるのかなと。当然、先人のことは子どもたちを含めて未来に伝えていくべきものだと思いますけれども、やはり、それ以上に未来をどうしていくかということの方が重要なのではないかなと思っています。

実は、アイヌの方々とコラボしてペンダントを個人的に作っています。レバンガとは全く関係なく、個人的に作らせていただいたと。それを結構身に付けていて、残せるものを出していく。もちろん、形あるものは壊れるので、それが良いというふうには思っていないけれども、そういったかたちで、先人が作ってきたものを残していかなきゃいけないものを、今後子どもたちにどのように伝えていくのかというところが、北海道150年事業の意味でもあるのかなと思っています。

僕自身何ができるかわからないのですけれども、今後皆さんと一緒に考えていければと思います。

あと、キャッチフレーズは決定しちゃったということでよろしいでしょうか。

（事務局：「まだです。」）

個人的な意見ですけれども、何となく、あまりインパクトがないのかなという感じがしてならない

ので、例えば、海外の人たちが見たときに、あるいは、若い世代の人たちに対して、果たしてこのキャッチフレーズはインパクトがあるのかなと考えたときに、こういう事業はどうしてもキャッチフレーズを付けたがるのですけれども、インパクトのないものが多すぎてしまって、どうしても頭に残らないのです。見たときに頭に残るものを、長いものではなくて一言でポンと。これも短いですが、そのような印象を受けました。

● **山谷委員（北海道）**

これは北海道の新しいキャッチフレーズとして決定されたときのチラシなので。

● **小磯座長（北海道大学）**

これは既に決定されたもので、それをこの機会に使おうかという事務局からの提案です。

● **大津委員（小樽商科大学）**

「試される大地」の次のキャッチフレーズということですよ。道として決まったということで、それを150年事業で使うかどうかという話ですね。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

「150年」ですから、「150」という数字は大事にした方が良くないかなと思います。キャッチフレーズに入れるかどうかはわからないですが、「150」という数字はもう少し大事に考えて、安易にこれに決めない方が良くないかなと思います。

（折茂委員が）おっしゃったように、事業のインパクトとしてはあまりないのかもしれないですね。

● **大津委員（小樽商科大学）**

これはしばらく使っていくのですよね。（事務局：「はい。」）150年事業としては別であり、いろいろなかたちで大きく見せるとか、いろいろあるのでしょうか。

● **河崎委員（作家）**

このチラシでいくと、写真でかなりイメージが誘導されているので、例えばこれが、PR動画などと組み合わせて文字をレイアウトすると、印象もかなり違うのかなと思います。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

例えば、これがあるのですけれども、「150」という軸になるものがボンッと付いて、インパクトのある動画などはできると思いますけれども。これありきでなくて、一回フリーに考えてみても良いのかもしれないですね。

● **小磯座長（北海道大学）**

既にある北海道のキャッチフレーズですから、150年においても、有効に、うまく活用して使ってもらえばと思います。

● **大津委員（小樽商科大学）**

綺麗にまとめるつもりはないのですが、これを道民が見たときに、「その先」というビジョンが、今はあまり見えないですけれども、この事業の中で、まさに「その先」みたいなものが、少しでもイメージできるようになることが狙いでしょうし、であれば、インパクトのあるものになるのではないかなと思います。私はそう解釈しました。

● **林委員（北海道ガーデン街道協議会）**

道内の方々の150年と、外から見た150年とは、また違うと思います。オヤジギャグっぽくなりますけれども、1、5、0で、「行こうぜ！北海道」（150）みたいな、そういうような視点も重要なのではないかなと。道内の視点と、道外から見た視点と、道外から見たときに150年を機にもっと来てもらおうよと。それがまた、海外の視点もまた違うでしょうし、いろいろな観点があるのではないかなと思います。

● **河崎委員（作家）**

150年を節目として、151年、160年、その後の200年と、そういった意味で見たときに、「その先の」という現時点で「150年事業」はスタートラインにあるわけですね。私は民間の人と共有できる話なのかなと思いました。

● **吉田委員（桐光クリエイティブ）**

道外ではなく、海外を意識した方が良いと思うのですね。北海道は日本の中でも特殊な、こんなに良い場所なので、国内で売れようとしなくて、海外で売った方が良いと思うので、私はそこを意識して良いのかなと思います。

● **林委員（北海道ガーデン街道協議会）**

海外でも、すごくインパクトのあるのはオーストラリアで、どこかの島が半年間で1千万円給与を払うので楽しい体験をどんどんアップしてくださいと。給与は1千万円だけど、何十億円の効果を生み出して、非常にインパクトがありました。

北海道にはたくさんの市町村があって、それを全て伝えきるのは非常に難しいのですけれども、いろいろなところにいるいろいろな（北海道関係の）海外の方がいると思いますので、そういう方々がもっと発信してくれる仕組みづくりというのも非常に重要なのではないかなと思いました。そういうことにお金を使っていくというのは非常に重要だと思います。

● **小磯座長（北海道大学）**

いろいろご意見がありました。なかなか収束して、事業としてまとめていくのは大変だと思います。良い意味で、良い意見はしっかり取り込んでいくべきだと思います。せっかく事務局の皆さんもこういう仕事に参画されているので、前向きに取り組んでいただければと思います。

あとはいかがでしょうか。よろしければ、今日予定されていた議事はこれで終了させていただきたいと思います。後は事務的なご連絡をいただくということで、事務局にお返しします。

● **平野政策局長（事務局：北海道）**

小磯座長、議事の進行ありがとうございました。また、委員の皆様におかれましては、多数の貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。今後の進め方でございますけれども、今日いただいた意見に対する事務局としての考え方も整理しながら、次回のワーキングには、素案の準備をしていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。また、作文につきましては、今日の審査方針に基づきまして、2次審査の方を、ワーキングの方々の何人かにお願いをさせていただいたうえで、最終審査を全員で行っていただきたいと思っております。

次回のワーキングは、7月20日の15時から17時を予定しております。正式には後日連絡をしますが、スケジュールの調整につきまして、よろしく申し上げます。

委員の皆様には、検討経過等、随時ご報告、ご相談をさせていただきたいと思っております。

本日は、長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。

(以 上)